

「近代家族」の概念実践

— 日本語版「名前のない問題」のアポリア —

上 谷 香 陽

1 問いの所在

1960年代後半以降欧米先進諸国では、近代家族⁽¹⁾の枠組を超えた人間関係の構築をめぐる様々な試行錯誤がなされてきた。およそ40年を経た今日、脱近代家族的な生活様式を支える社会制度も、目に見える形で整備されてきている⁽²⁾。そのきっかけとなったのが、第二波フェミニズム運動の流れである。20世紀前半に起こった第一波フェミニズム運動は、婦人参政権といった法的な男女平等に力点を置いていた。これに対し1960年代後半からの第二波フェミニズム運動は、日常の生活様式における問題を提起した。性別役割分業を前提とする家父長的・男性中心主義的な近代家族のあり方に対して、異議を申し立てたのである。

このような運動が生起する背景には、近代家族における「幸福」をめぐる、女性＝「妻」たちの漠然とした不安と不満があった。自ら賃金労働に従事する必要がないほど物質的な豊かさに満たされている境遇。豊かな家庭で、愛する夫と子どもの世話をする毎日。幸福であるはず、幸福でなければならない境遇で不可避に感じてしまう不安や不満。しかし自分がなぜ不安なのか、何に不満があるのかを、説明することができない。むしろこの境遇で不幸を感じてしまう自分自身に、何か深刻な問題があるのではないか。妻たちは出口の見えない、いわゆる「名前のない問題」を抱え込んでいたのである。

やがて女性たちは、そうした「不幸」を経験し

ているのが自分だけではないことを知る。自らの経験を互いに語り合う過程で、女性たちは自分たちの経験に対するそれまでの説明のされ方に異議を唱えるようになる。現状に不満を感じてしまう原因は、たとえば「女性性の欠如」といった、自分の性格にあるのではないのではないか。むしろ、女性を政治的・経済的活動から排除し二流市民として位置づける社会制度、そのような社会制度を自然化し無問題化する家族内の人間関係（夫婦関係）のあり方にあるのではないか。自らの経験を説明する際の発想の転換は、個人的な問題を政治的な問題として再定義することを可能にした。「家族」をめぐる問題は決して「私的」なことからではなく、むしろ社会の問題そのものであると認識されるようになったのである。

他方、日本ではどうであろう。日本においては、21世紀の欧米先進諸国でみられる脱近代家族的な生活様式への動き——婚姻以外のパートナー関係の増加、結婚の脱異性愛化、働き方の柔軟化（ワーク・ライフバランス）、子育ての社会化、子育てへの父親の参加など——はいまだ顕著ではない。たしかに、近年、特に若い世代で男性（「夫」）の所得水準が下降傾向にあることから、何らかの形で賃金労働に参加する（せざるを得ない）女性（「妻」）が大半を占めている。近代家族における、「男（夫）は仕事、女（妻）は家庭」の性別役割分業の大前提は、すでに維持できなくなってきているのだ。しかし今のところこの変化は、性別役割分業自体の解体ではなく、「男（夫）は仕事、女（妻）は仕事と家庭」という新たな性

別役割分業を生み出すにとどまっている。日本社会は、いまだ、基本的には近代家族的な生活様式によって組織されていると言えるのである。

本論では、日本社会における「近代家族」の一つのあり方について考察したい。ただしそれは実体としての近代家族というよりは、私たちの日常生活を組織するものの見方、解釈枠組、装置としての「(近代) 家族」のあり方についてである。「家族」という概念は、私たちの日常生活において、自己や他者の行為を意味づける一つの装置として作動している。私たちはこの概念を使用することによって、例えば自己や他者を「妻」や「夫」とカテゴリー化し、それらのカテゴリーに照らして自他の諸行為を適切なもの、適切でないもの、関連あるもの、無関連なものとして、理解し、相互行為する。この意味で実体としての近代家族もまた、自他の行為の様々な記述可能性の網の目をとおして、まさにそこにあるものとして私たちの前に立ち現れてくると考えられるのである。

以下では、山本文緒の小説『あなたには帰る家がある』を題材に、「夫婦」をめぐる記述の中で「家族」という装置がどのように作動し、人々の行為をいかにして理解可能にさせるのかを考察する。

「専業主婦」の主人公の現実には、あるべきはずの「幸福」が欠如している。彼女は自分の「結婚」生活に不満を持っている。しかし同時に、幸せなはずの境遇を不幸に思ってしまう自分自身にも、不満を持っている。主人公は、現在は失ってしまったが、過去には確かにあったはずの「幸福」をもう一度取り戻そう、取り戻せるはずだと試行錯誤する。この小説は、ある意味で「夫婦＝家族」の危機の物語である。他方、そうした「危機」をとおして、登場人物たちはそれまであたりまえのこととして不問に付していた「夫婦」という関係を改めて対象化し、様々なやり方で記述する。「家族」なるものは、その存在が自明のことではなくなった時発せられる様々な記述をとおして、かえってその輪郭を際立たせるのである。

主人公は、自分がこれまで自明視しあたりまえのことと考えてきた「夫婦＝家族」のあり方に、疑問を抱く。しかしながら、結局のところ、その問題提起は宙づりのまま行き場を失ってしまう。その論理とはいかなるものかを考察したい。

2 近代家族の概念実践——山本文緒『あなたには帰る家がある』を読む——

この小説で描かれているのは、1990年代前半、都心から一時間ほどの郊外に住む、20代後半の夫婦の日常である。主人公のカップルは、子どもができたことをきっかけに結婚を決意した。妻の真弓は勤めていた商社を辞め、専業主婦になった。夫の秀明は契約社員として働いていた映画配給会社を辞め、義父の世話で住宅販売会社の正社員に転職した。彼の転職を条件に義父から頭金の援助を受け、新居のマンションも手に入れた。結婚当初、かれらは、「夫婦」のあり方について微塵も疑ってはいなかった。

2-1 近代家族の陥穽——「妻」の憂鬱——

しかし結婚から一年半が過ぎた頃、妻の真弓はしだいに「退屈で孤独な日常」に我慢できなくなっていく。

真弓はよく、わざと自分の家から離れた公園に赤ん坊の麗奈を連れて行った。なるべく主婦たちが集まらないような、小さくて寂れた公園を選んだ。家に籠っているのも憂鬱だし、近所の人たちと当たり障りのない世間話をするのも憂鬱だった。夫がいる休日も憂鬱だし、夫の帰りが遅くても憂鬱だった。晴れ晴れとして楽しい時間など一分もなかった。結婚式を挙げ、娘が生まれるまでのほんの数か月間だけが、夢のように幸福だった。娘が生まれてからの日々は、まるで突然地獄に突き落とされたようだった。はた目には、どこにも不幸は見えなかったはずだ。好きな男性との間に子供ができて、それで結婚したのだ。仕事だって望んで辞めたのだ。娘はもちろん

可愛い。誰よりも愛していると思う。けれど、まったくこちらの言葉が理解できない生き物と、一日べったりいっしょにいななければならないという事態は、想像を絶して苦痛だった。赤ん坊の奴隷になる日々だ。夫の秀明は、夜遅くまで帰ってこない。近所の人とは話が合わない。母親は“自分達で何とかしなさい”というのが口癖だった。たまに友達に電話をしても、向こうだって忙しい。そうそう真弓の愚痴ばかり聞いてはくれない。憂鬱な日々。そして、自分が憂鬱であることに対する罪悪感。幸福なはずなのに。不幸だなどと言える立場ではなかった。(p. 328)

彼女の憂鬱は、「まったくこちらの言葉が理解できない生き物と、一日べったりいっしょにいななければならない苦痛」というより、そもそも自分がそうした「苦痛」を感じてしまうことそれ自体にある。愛する子どもとずっといっしょにいられるのに「苦痛」に感じてしまうなら、それは自ら望んで手に入れた生き方を否定することになる。彼女は「好きな男性」との「結婚」が、「幸福」をもたらすはずだと考えていた。「結婚式を挙げ、娘が生まれるまでのほんの数カ月間だけ」は、たしかに「夢のように幸福だった」のである。この過去の経験が、「結婚」と「幸福」を所与のものとして結びつける。そして、彼女の現在の生活にあるべきはずの「幸福」の「欠如」を認識させるのである。

真弓はほどなく、この焦燥感が、「社会と係わっていない」こと「社会から弾き出されている」ことによるものだと考えるようになる。彼女は、子供を保育園に預けて働くことを決意する。保育料より高い時給の仕事を探し、一月かかってようやく保険の外交の仕事を見つける。パートの面接の日、真弓は久しぶりに得た解放感に「泣きたいほど嬉しく」なる。

真弓は歩き出した。四センチのヒールも、タイトスカートも久しぶりだ。彼女はわざと早足で桜並木を

歩いてみた。一人きりで歩くというただそれだけの行為が、彼女には心底嬉しかった。自分のペース、大人のペースで歩くことがこれほどまでに心地良いとは、子供がいない人間には分からないだろうなと思った。(p. 31)

保険の外交という仕事の現実にとまどいながらも真弓は、「少なくとも、今は自分自身の力で生きている感触がある。人に許可されて生きているわけではない (p. 329)」と実感できるようになる。だが依然として、真弓が結婚生活に感じていた漠然とした違和感は解消されなかった。むしろその違和感は、夫秀明の態度に対する不満として、より鮮明になっていく。パートとはいえ真弓は「テレビさえ見る時間がないほど」忙しくなった。しかし秀明は、あいかわらず家事も育児もほとんどやろうとはしない。

何故だろう。真弓は娘を抱きしめてそう思った。私だけの子供ではない。秀明の子供でもあるのに、何故彼は何もしないのだろうかと思つた。頼めばおむつを代えてくれることもあるし、休みの日はお風呂に入れてくれることもある。抱き上げてあやしてくれることもある。けれどそれは、あくまでも真弓の補助だった。手の空いている時に、ちょっと手伝ってくれるだけのことだ。真弓が頼まなければ、決して自分から子供の面倒をみようとはしない。(p. 128)

真弓は、自分の人生が「妻」や「母」という役割に還元されることに疑問を抱き、「社会」と係わりをもつべく働きに出る。しかしながら、夫の秀明は彼女との関係を相変わらず既存の「夫／妻」役割でしか捉えていない。秀明は、子どもの世話はあくまで「妻」の仕事であり、「夫」である自分が関知することではないという態度を示す。秀明は、パートの仕事と家事育児を一手に引き受ける真弓の、精神的、肉体的疲労を理解していない。自分の負担が軽減しないこと以上に真弓が不

満に思うのは、夫の態度が、自分や娘への無関心にみえることである。

いくらパートとはいえ、真弓は一生懸命働いていた。娘の保育園の送り迎えをし、夫の食事の心配をし、掃除だって何だって真弓がほとんど仕切っていた。それなのに、秀明は何が不満なのか知らないが、真弓にお疲れさまの一言も言ったことがない。その上、浮気などしているとしたら、あまりにも理不尽なのではないか。(p.198)

真弓が働き出してから、夫の秀明は日に日に不機嫌になり、ついには、真弓が気を使ってあれこれ話しかけても生返事しか返ってこなくなる。次第に真弓は夫の浮気を疑うようになる。彼女は、悲しいというより、夫に対して「怒りが湧いてくる」を感じる。彼女の怒りの所在は、夫が浮気をしているかもしれないという疑念にあるのではなく、むしろ、夫がそもそも自分や子供に対して関心を示さないことにある。なぜそんなに「冷たく」されるのか、真弓には理解ができない。

いっそのころ、別れてしまおうか。そう思いついたとたん、意志に反して目頭がじわりと熱くなる。真弓は秀明が好きだった。出会った頃の、新婚の頃の、優しい秀明が好きだった。別れたくなんかなかった。何故好きなのに、別れなければならないのだろう。秀明と結婚をしてよかったと、つい数カ月前までは思っていたのに。(p.199)

秀明の態度は、ある意味で、近代家族における典型的な「夫」役割を忠実に遂行した結果とみなすこともできる。「夫は仕事、妻は家庭」という役割分業のもとでは、家庭とは、「夫」の関知できない、「妻」の領域である。秀明は真弓との関係を、あくまで「夫／妻」役割の枠内で捉えている。まさにその秀明の役割分業意識が、家庭への無関心に、ひいては妻や娘への無関心につながっているのである。

しかしながらこのことは、1970年代以降日本社会でも一般的になった、「恋愛」と「結婚」の結びつきという前提を危うくする。夫婦のどちらか一方が相手に対して無関心になったなら、「結婚」の中で「恋愛」を持続することはできなくなる。この意味で真弓はいわゆる「ロマンチックラブ・イデオロギー」に捕われていると言えるのかもしれない。彼女にとって「結婚」は、「恋愛(romantic love)」が最終的に行き着く地点である。彼女は「夫婦」関係の中で「恋愛」を持続させようとする。自分は秀明をまだ「好き」なのだから、「結婚」を解消したいわけではない。ただ、「優しい秀明」をもう一度取り戻したいのだけなのだ。しかしながら、結婚「生活」に不可避に結びついている「夫／妻」役割を忠実に遂行しようとすればするほど、お互いへの関心を維持することは困難になる。とするならば、彼女がかつてあったはずの「幸福」を取り戻すためには、「結婚」という枠組を維持しながら「夫／妻」役割を超えた人間関係を構築しなければならない。それはどうということなのか。そもそも、かつてあったはずの「幸福」とは何だったのか。真弓にとっての「名前のない問題」の所在はそこにある。

2-2 近代家族の陥穽——「夫」の憂鬱——

ある意味で、むしろ秀明の方が、「夫」という役割を深く内面化し、自分と役割を一体化していると言える。秀明にとって「結婚」とは、自分の人生を決定づけてしまう、後戻りできない選択である。

子供ができなかったら結婚しなかったろうな。秀明は密やかにそう思った。(中略)こんな形で結婚するつもりはなかったが、一生独身でいようと思っていたわけではなかった。早いか遅いかの違いだけだ。それに一度結婚してしまえば、もう二度と同じことで頭を悩ます必要はないのだ。(p.50)

秀明は、結婚して子供が産まれたとたんに、独身の

同年代の人間が妙に子供っぽく感じられるようになった。人生の選択肢をまだ持っている自由。選ぶ必要に迫られていない自由。そういうものを目の当たりにすると、すでに道を選んでしまった自分が、彼らとは別の世界に来てしまったような気がした。うらやましくもある反面、向こう側にいる人間とはもう話が合いはしないのだという、ほんのちょっとした優越感もある。(p.19)

真弓とは異なった意味で、秀明にとっても「結婚」とは人生のゴールである。真弓にとってそれが、「愛されていること。守られていること。何の心配もない毎日。未来 (p.329)」を意味するとすれば、秀明にとっては、人生の最終的な選択をし「大人」になることを意味する。一度選択すれば選り直すことができない反面、一度決めてしまえばもう二度と考える必要がなくなる。「夫」になることを選択した時点で秀明は、自分の人生のある部分について考えることをやめてしまっている。

秀明は、子供の頃から映画が好きで、自分で撮らないまでも何らかの形で映画に係わっていたいと、映画の配給会社に勤めていた。契約社員だったが「一人暮らしをするには十分な金額」を貰っていた。しかし、それでは家族三人を養うことはできない。彼は義父の勧めに応じて、転職を決意したのである。

反発がないわけではなかった。アルバイトとは言え、自分で選んで好きな仕事をしていただけだから、はいそうですかと転職するのも癪だった。けれど、真弓の父親が言うことはいちいちもっともだった。(p.52)

こうして秀明は、独身時代とは「別の世界」にやってくる。むろん秀明も「真弓のことは好きだった。好きだったからこそ付き合っていた (p.49)」。しかし「結婚」によって、彼にとって真弓は、もはや「恋人」ではなく、養うべき「妻」に

なった。彼の人生は、「妻子」を養う「夫」という役割の遂行に捧げられることになったのだ。そのことは、真弓自身が望んだことでもある。だから秀明は、「妻」がなぜ不機嫌なのか理解できない。

結婚してからというもの、ゆるやかな坂を徐々に下りていくように真弓は不機嫌になっていった。人と喧嘩をしたり、議論をしたりするのが苦手な秀明は、そのせいで居心地の悪い思いをしていた。自分の妻に対してそう多くのものを望んでいるつもりはない。普通にしてくれればそれでいいのに、何故ほからかでいられないのだろうと彼は思った。(p.23)

結婚してここに新居を構えた時の、真弓の恍惚とした表情を秀明は覚えていた。引越しの荷解きをする手を止めて、彼女はうっとり天井を見上げていた。(中略)「ヒドと結婚して本当によかった」と真弓は言った。何もかも彼女の望んでいたものだった。満員の通勤電車で駆け込む必要もなく、連日の残業や複雑な人間関係に頭を悩ますこともない。望みどおり子供を産んで、この日当たりのいい清潔な部屋でのんびりと暮らして行けばいいのだ。(中略) あんなに望んでいた結婚をして子供も産み、環境のいいマンションを手に入れ、自動的に金の振り込まれる財布も手に入れた。それなのに、どうして今更働きたいなどと言うのだろうかとは彼は首を傾げた。(p.27-28)

結局秀明は、「彼女にセールスなどできるわけがない。きっと半年もたたないうちに音を上げるに違いない」と考え、真弓が働くことに賛同する。しかし、妻が働きに出たことで生じる生活の小さな変化に、彼はしだいに不満をつのらせていく。

せっかくの休みに女房は子供を押しつけて外出し、それならゆっくりビデオでも見ようかと思うと、子供は泣くし、オムツはどこにあるか分からないし、終いには客からクレームだと会社に呼び付けられる。

女房の母親に子供を預けに行けば、頭を下げているのに嫌みを言われるし。その上商談中にくだらない用事でポケベルを鳴らされ、帰ってくれば給料が安いあなたが悪いと言われる。(p.45)

鬱憤が溜まっているのは秀明も同じだ。家族三人の生活が少しでも楽になるように、懸命に働いているのだ。それが自分の役割であるからこそ、安い小遣いで我慢し、嫌な客にも頭を下げている。それどころか、たまの休みも真弓の買い物に付き合い、子供の面倒だってみている。真弓が働きたいというのは、自分の役割から逃げ出したいだけなのだ。子供と夫の面倒をみるのがつまらなくなっただけなのだ。共働きというスタイルに持ち込んで、今以上に自分の役割をこちらに押し付けたいだけなのだ。(p.58)

1990年代前半は、夫一人の給料で妻子を養うという前提はまだ健在であったようだ。真弓が働きに出ていても、秀明にとっては、依然として「夫は仕事、妻は家庭」という原則は崩れない。「妻」が仕事をするのはあくまで彼女の都合であり、「子供と夫の面倒」をみるのは彼女の役目である。むしろ、一家の稼ぎ手という「夫」役割を自分がどれだけ必死でこなしているか理解しない、「妻」の態度に不満をつのらせるのである。

秀明もまた、いっそのこと離婚しようかと考える。しかしすぐにそれ以上考えることが恐くなる。「つまらない人生だと本気で思ってしまったら、あまりにも自分が哀れになってしまう (p.53)」からだ。秀明が離婚できないのは、表面上は、妻や妻の実家の反応を想像するだけでうんざりするという理由からだ。しかしその背後には、いつのまにか、「夫」という役割を超えたところで「自分」の人生を生きられなくなってしまったことに対する、漠然とした不安がある。

自分の人生は、いったいどこにあるのだろうか。秀明はそう思った。映画に興味をもったのは、中学一年の頃だった。少ない小遣いから映画雑誌を買いあさ

り、地元では公開されない単館ロードショーを東京までひとりで見に行った。楽しかったあの頃。あの頃には人生は自分の手の中にあった。いつから、自分はそれを手放してしまったのだろうか。(p.303)

「結婚」によって彼が選んだ後戻りできない道は、「自分」の人生を手放し「夫」としての人生を生きる道であった。たしかに秀明にとっても、「恋愛」と「結婚」は結びついていた。しかし彼にとって「恋愛」はあくまで「結婚」のきっかけであって、「恋愛」を「結婚」生活の中で持続させようという欲求は真弓ほど高くはない。というより彼にとって「夫」になることは、そもそも「自分」の欲求とは別のところで人生を生きることであった。それゆえ彼は自分の妻に対しても、そう多くのものを望まない。「普通」に「妻」役割を遂行し、「ほがらか」でいてさえくれればそれでいいのだ。

にもかかわらず、真弓は自分の役割に満足しないばかりか、秀明に対して彼の「役割」以上のものを求めてくる。彼が憂鬱なのは、直接的には、真弓の「過剰な」要求にあるのかもしれない。しかし実のところ彼にとっての「名前のない問題」は、仮に真弓と別れたとしても、一度手放してしまった「自分」自身の人生は二度と戻って来ないかもしれないという、漠然とした恐れである。

3 日本語版「名前のない問題」のアポリア

3-1 宙づりにされる「問い」

二人の憂鬱はいずれも、親密な関係において、「夫／妻」という役割以外の人間関係を構築できないことに起因する。

一見したところ、真弓は、既存の「妻」役割に疑問を抱き、秀明と「夫／妻」役割を超えた関係を構築しようと試行錯誤しているように見える。真弓は、出会った頃の、新婚の頃の「優しい秀明」を取り戻そうとする。「結婚」とは独立した、

「恋愛」における二人の関係の中に、修復の手がかりを見出そうとするのだ。しかしながら、真弓と秀明の「恋愛」が、そもそも「結婚」と独立に成立していたかどうかは疑わしい。秀明と出会った頃の真弓は、仕事上の行き詰まりから、「ほとんど強迫観念に近いほど、結婚をして家庭に入りたいと願っていた (p.88)」のである。真弓が秀明にかつて感じていた「優しさ」は、彼を未来の「夫」候補とみなしていたからこそ、知覚可能だったのではないだろうか。

真弓が失ってしまったという、かつてあったはずの「幸福」の内実にも同じことが言える。彼女が新婚の数カ月感に感じた「幸福」とは、「愛されていること。守られていること。何の心配もない毎日。未来。」のことである。この感情は、真弓が現在疑問に思っている「夫／妻」役割を、むしろ自明視することによってのみ得られるものであろう。彼女は、過去との対比において、秀明との現在に「欠如」を見出す。そうした「欠如」はある種の「夫／妻」役割を所与として仮設することによって、認識可能になる。にもかかわらず彼女は、そのような「夫／妻」役割に、もはや愛着を持ってなくなっているのである。

真弓は、かつて感じた「幸福」を失ってしまったという意味で憂鬱である。と同時に、仮にかつて感じた「幸福」を取り戻したとしても、もはやそれを幸福とは思えないかもしれない、という意味でも憂鬱なのである。秀明に対して「好きなのに、大嫌いだ」という両義的な思いを抱えたまま、真弓の思考は停止する。「人が人を好きになるということは、どういうことなのだろう。考えれば考える程、訳が分からなくなる (p.380)」のである。

一方秀明は、真弓の「不機嫌」に嫌気がさし、顧客の妻である綾子と「恋」に落ちる。彼は次第に真弓との離婚を考えるようになる。

知れてもいいじゃないか。秀明はぼんやりとそう思った、何もかも打ち明けてしまえばいいのだ。そう

すれば、真弓は自分から離れていくだろう。そうして、綾子の手を取ればいいのだ。(p.302)

しかしそこで彼は「愕然と」する。

彼の考えていることは、決して想像の域を出ることがなかった。決してそれを実行しないだろうと、自分自身で分かっていた。何故なんだろう。秀明は沈んだ心で思った。金のこともある。いや、それが第一なのかもしれない。もし真弓と別れて、綾子と結婚するのであれば、まず真弓には慰謝料と子供の養育費を払わなければならないだろう。そして、綾子と綾子の息子ふたりを養わなければならないのだ。いったい月にいくら稼いだら間に合うのだろう。そうしたら、自分の人生はどこにあるのだろうか。(p.302)

「浮気」においてさえ、秀明は、「夫／妻」役割の枠内での人間関係しか作ることができない。彼は暗黙のうちに、「妻」や「母」という役割に親和的な女性を、自分の「恋」の相手に求める。それゆえ、彼の人生には、「夫」という役割が不可避につきまとう。綾子との「恋」も、行き着くところは「結婚」である。真弓ではなく綾子を選んだとしても、いずれにせよ彼は「妻」を「養わなければならない」のである。そしてついに秀明は、「自分」の人生がどこにあったか、見失ってしまうのである。

真弓も秀明も、自分の「役割」に漠然とした違和感を感じている。しかしながら、「夫／妻」役割に対するかれらの問題提起は、宙づりにされたまま行き場を失う。

「夫婦の役割」をめぐる激しい言い争いの末、二人は、「三か月間の収入が少なかった方が、家で奥さんをやる」という「馬鹿馬鹿しい勝負」をする。

秀明は先程から二度も投げつけられた花柄のエプロンを、真弓の膝へ放った。「いいか。それで負けた

ら、君は仕事を辞めて主婦業に徹するんだぞ」真弓が彼の顔を見上げる。「いいわ」妻の瞳にはもう涙はなかった。「その代わり、あなたが負けたら、あなたが主夫になるのよ」負けるわけがない。甘ったれで、世の中のことは何でも自分の思い通りになると信じている、世間知らずの女に自分が負けるわけがない。私が間違っていましたと妻に言わせるのだと、秀明は大きく頷いた。(p.243-244)

一方真弓は、もし秀明とのこの「勝負」に勝つことができたら「きっと何かが変わるはずだ」と考える。そして、一件でも多くの契約を取ろうと、今まで以上に躍起になる。しかし、彼女はしだいに、「何故こんなにしてまで自分たちは一緒に住んでいるのだろう。」と、秀明と一緒に暮らすこと自体の意味を疑い始める。

娘のために一番いいことは何なのだろう。分からなかった。真弓には分からなかった。(p.381)

真弓は、固定的な「夫／妻」役割や、そうした役割意識に基づく夫の態度に反発し、秀明との「勝負」にかける。しかしたとえ勝利を取めて二人の立場が入れ替わったとしても、役割の中味も、その固定的な関係も根本的に変わることはない。むしろこの「勝負」にこだわればこだわるほど、かえって真弓と秀明の関係は「夫／妻」役割の内部に閉じ込められてしまうのだ。そのような矛盾に真弓は薄々気がついている。しかし漠然とした違和感を感じながらも、彼女の思考はそこで停止してしまうのである。

3-2 失われた「家」／帰る「家」

物語の終盤、「浮気」相手の綾子とその夫が家に押しかけてきて乱闘騒ぎを起こすという「事件」の後、秀明はいよいよ抜け殻のようになってしまう。

(略) 秀明はやはり綾子とのことは、自分の中で

「浮気」だったのだと静かに思った。では、真弓に対する思いは“本気”なのだろうか。そうとは思えない。自分は誰かを本当に好きになったことはきつと一度もないのだろう。自分のことすら、本気で好きになったことがないのだ。(p.400)

秀明は自分の中から、何かがなくなってしまったのを感じた。子供の頃には、大きな塊だったもの。それは大きな氷のようなものだ。時間とともに、少しずつ、それは溶けて行った。なくならないように、全部溶けてしまわないように、気を付けていたはずだった。けれど、それはもう跡形もなく姿を消し、どこかへ流れていってしまったように感じた。哀しくはあったが、なくしてしまったことで逆に楽になったようにも感じた。一度なくしたものは、もう二度となくさなくて済むからだ。(p.402)

あてにしていた顧客からの契約も取れなかった秀明は、「勝負」に負けたことを宣言し、「僕みたいな男を養うことはない」と離婚を申し出る。しかし真弓はそれを拒絶する。私が勝ったのだから、あなたが家で家事をするのだ、娘の面倒をみるのだと。

秀明は何か言おうと言葉を搜した。けれど何も言うことはなかった。妻は正しいのだ。間違っているのは自分だ。けれど、ひとつだけ質問を見つけたことができた。「それで、君は幸せなのか？」真弓の顔がそこで歪んだ。けれど、涙は瞳をうっすら覆っただけで、零れなかった。(p.404)

真弓はずっと、かつてあったはずの「幸福」を取り戻そうとしてきた。働きに出たのも、秀明との「勝負」にかけたのも、それによって「優しい秀明」や、彼のことを「好き」だという感情が戻ってくるかもしれないと考えたからだだった。しかし、「夫」役割の遂行に失敗した秀明には、もはや何も残っていなかった。秀明が「なくしたもの」は、真弓への関心であり、自分への関心であり、自分

の人生への関心である。真弓が渴望していたかつての「幸福」は、もはや戻ってはこないのだ。

にもかかわらず、真弓は秀明と別れようとはしない。むしろ彼女はここで、初めて、自らの意志で「家族」を作ることを選択するのである。かつて真弓は、「愛されていること。守られていること。何の心配もない毎日。未来」という「幸福」を一方的に受けていればよかった。秀明との新しい生活を始めた真弓は、「幸福なのか、不幸なのか、よく分からな」い。しかも、夫と子どもを守る人間は自分しかいないのだと思うと、本当にできるのだろうかと不安で恐ろしくなる。しかし、「夫」役割を引き受けた彼女は、少なくとも「守られる」という受動的な立場から、「守る」という能動的な立場に回ることになる。

秀明が会社に辞表を出したその足で、真弓は実家に行き、「これからは真弓が一家の大黒柱として働き、秀明が主夫になる」ということを宣言する。怒りと戸惑いで動揺する父母を振り切るようにして、彼女は家を出る。

もうこれ以上何も聞かれなくなかった。自分にも分からないことが、両親に分かるはずがない。分かってもらおうと思って来たわけではなかったのだ。では、何をしに自分は実家に来たのだろうかと思つた。玄関を出て、生まれ育った家の屋根を見上げた。ああそうか。真弓は息を吐いた。さようならを言いに来たのだ。お嫁に行く時に言いそびれた、さようならを。(p.412)

彼女が「娘」という役割と決別したこの時点で初めて、真弓と秀明の「家族」は、言葉の厳密な意味での「近代家族(核家族)」になったのだと言える。皮肉なことに、逆転した「夫／妻」役割は、真弓と秀明を再び「夫婦」として結びつける。「夫／妻」役割に対する違和感から始まったかれらの試行錯誤は、むしろ「近代家族」の完成として収束していくのである。

「専業主夫」となって半年がたったある日、秀

明は買い物の途中で偶然、例の「勝負」の期間、真弓もまた当てにしていた顧客からの契約を取り損ねていたと知る。

(略) そうならば、もしかしたら秀明は勝負に勝っていたかもしれない。給料明細など見ずに秀明は負けを宣言していたが、もしかしたら結果は違ったのかもしれない。「もう帰ろうよ！」麗奈が秀明の腕の中でぐずる。彼は笑って頷いた。そうだ、もう帰ろう。自分には帰る家があるのだから。(p.425)

真弓と秀明の「結婚」生活は、あるべきものとしての「家族」を仮設することで、成立可能になっていた。二人の関係がうまくいかなかった時にも、かれらは、あるべき「家族」が存在するという前提自体を疑っていたわけではなかった。むしろ、あるべきはずの「家族」を前提とするがゆえに、現実の「欠如」が認識可能になっていたのである。自分たちの生活には、あるべきものがない。それを取り戻そうと試行錯誤するが、かれらは結局「失敗」してしまう。最後の場面で秀明はさまざまな思いを中絶し、「家」に帰る。「欠如」の跡に見出されるのは、二人の実質的な関係というよりは形式的な「夫／妻」役割において維持される、帰属の場所としての帰る「家」なのである。

4 おわりに

以上本論では、「近代家族」を実体としてではなく、人間の行為や感情の記述を一定のやり方で理解可能にする一つの装置として考察してきた。「近代家族」は私たちの日常生活において「あるべきもの」として仮設され、男、女、夫、妻、親子、義父、息子、実家、娘、主夫、主婦などの人に関するカテゴリーと、養う、養われる、守る、守られる、稼ぐ、面倒を見る、働く、普通、優しい、好き、嫌い、幸せ、不幸せ、本気、浮気といった人の行為や感情や状態に関わる記述を一定の

論理で結びつけるのである。

真弓と秀明の物語は、「近代家族」の「危機」を描いたものとして受け取られるかもしれない。たしかにかれらの「夫婦」生活は「うまくいっていない」。しかし、幸せとは何か、欠けているものは何かをめぐるかれらの感情や行為の意味は、あくまで「近代家族的」生活様式における「夫婦」役割を基準とし、そこからの偏差として編成されているのである。真弓と秀明は、そもそもそのような「夫婦」役割を出発点とすること自体に根本的な問題があるのかもしれないと薄々気づいているようにもみえる。ただ、「近代家族」のあり方それ自体に対して根本的な疑念を差し挟もうとすると、かれらは「意思に反して目頭が熱く」なったり「それ以上考えることが恐しく」なり、自分の感情や行為をうまく説明できなくなる。結局どうしたらよいかわからなくなり、思考が停止してしまうのだ。

この意味で、「近代家族」は、「家族の危機」を描く物語の中で、まさにそうした「危機」の理解可能性を支える装置として、休むことなく作動し続けていると言える。「近代家族」とは、実体としてあるというより、それ以外の生活様式を想像することができない、そもそもそれ以外の生活様式を想像することの意味がわからないという、否定の効果として維持、再生産されるのである。

真弓と秀明の物語は、あくまで「近代家族」の枠内で繰り広げられていた。他方、冒頭でも述べたように、1960年代後半以降の欧米先進諸国では、この物語における真弓の憂鬱と同型の「名前のない問題」が、「近代家族的」生活様式の転換を促すきっかけとなった。社会生活における様々な制度の整備の前に、人々の生活様式の内側からの変化があったのだ。

本論の見方からすればこの変化は、実体的な「近代家族」から実体的な「脱近代家族」への変化というよりむしろ、私たちの日常生活をめぐる、人に関するカテゴリーと行為、状態、感情に関わる記述が、それまでとは異なったやり方で結

びつくようになったこととして捉えられる。言い換えれば、親密な関係における自他の行為をめぐる適切／不適切、関連／無関連、普通／異常、好き／嫌い、幸福／不幸の記述が、必ずしも性別役割分業としての「夫婦」（あるいはそのヴァリエーション）と結びつかなくなったこととして捉えられるのである。それはいかにして可能か。またそれを可能にする論理とはいかなるものか。「脱近代家族」的な生活様式を探究する際の一つの論点が、そこにあると考える。近代家族という人間関係や生活様式、それを支える社会制度の現状と変化について、私たちは人間社会現象の記述可能性という論点から社会学的探究を行うことが可能だと考えるのである。

注

- (1) 近代家族の社会学的定義として落合（1997）がしばしば引用される。それによれば、「近代家族」とは、「(1) 家内領域と公共領域との分離 (2) 家族構成員相互の強い情緒的關係 (3) 子供中心主義 (4) 男は公共領域・女は家内領域と言う性別分業 (5) 家族の集団性の強化 (6) 社交の衰退とプライバシーの成立 (7) 非親族の排除 (8) 核家族」(落合 1997: 103) という特徴を持つ。
- (2) 欧米先進国における「脱近代家族」的生活様式への社会変容については、上谷（2006a）（2007）も参照。

文献

- 落合恵美子（1997）『[新版] 21世紀家族へ』有斐閣選書。
- 酒井直樹（1996）『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置——』新曜社。
- Smith, Dorothy（1987）*The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*. Toronto: University of Toronto Press.
- （1990a）*The Conceptual Practices of*

- Power: A Feminist Sociology of Knowledge*,
Toronto: University of Toronto Press.
- (1990b) *Text, Facts, and Femininity: Exploring the Relations of Ruling*, London: Routledge.
- (1999) *Writing the Social: Critique, Theory and Investigations*. Toronto: University of Toronto Press.
- (2005) *Institutional Ethnography: A Sociology for People*. Altamira.
- 上谷香陽 (2004) 「ドロシー・スミスの『フェミニスト社会学』——性別の捉え方・論じ方の形式をめぐる——」博士学位論文, お茶の水女子大学.
- (2006a) 「ジェンダーを社会学するとはどういうことか? ——ジェンダー概念とその使用をめぐる一考察——」『ソシオロジスト』第8号, 武蔵大学社会学部, pp.1-23.
- (2006b) 「化粧における『身体』——<素肌>の社会的構成——」『応用社会学研究』, 第48号, 立教大学社会学部, pp.153-161.
- (2007) 「近代社会の探究としてのジェンダーの社会学」『ソシオロジスト』第9号, 武蔵大学社会学部, in printing.
- 山本文緒 (1994) 『あなたには帰る家がある』集英社.